

# 衛研ニュース

## No.158



クサウラベニタケ↑

↑ウラベニホテイシメジ↑



ムキタケ

ツキヨタケ

ヒラタケ

今年はキノコによる食中毒が全国で相次いで発生しました。その原因として最も多かったのがクサウラベニタケ、ついでツキヨタケです。上の写真は毒キノコのクサウラベニタケ（左）と食用のウラベニホテイシメジ（右）、下の写真は毒キノコのツキヨタケ（中央）と食用のムキタケ（左）・ヒラタケ（右）の写真です。

みなさんは見分けがつかますか？ 詳細は次ページをご覧ください。

### もくじ

- ※ 山形県におけるキノコ中毒発生状況 ..... 和田 章伸 (2)
- ※ 来春はスギ花粉の大飛散が予想されます!! ~早めの対策を~ ..... 最上久美子 (3)
- ※ 薬になる植物 (89) スベリヒユについて..... 笠原 義正 (4)

編集発行 山形県衛生研究所

平成22年12月10日発行  
 〒990-0031 山形市十日町一丁目6番6号  
 Tel. (023)627-1108 生活企画部  
 Fax. (023)641-7486  
 URL ; <http://www.eiken.yamagata.yamagata.jp/>

## 山形県におけるキノコ中毒発生状況

今年は夏の猛暑の影響でキノコの発生が遅れました。当初、不作といわれていたマツタケですが、雨が降り気温が一気に下がった9月中旬ころから一転して豊作の年になりました。マツタケのほかにも色々なおいしいキノコがたくさん採れ、キノコ狩りを楽しんだ方も多いのではないのでしょうか。

その一方で、今年は例年になくキノコによる食中毒が多く発生しました。厚生労働省のまとめでは10月31日現在、全国で85件発生しており、過去10年間で最も多かった平成16年の79件を抜きました。なかにはスーパーや産地直売所などで食用キノコと間違えて毒キノコが販売された事例もありました。山形県では8件発生しており(表)、福島県の16件について2番目に多く発生しております。県内におけるキノコによる食中毒は、過去10年間で47件発生し、そのうち最も件数の多いのがツキヨタケ、次いでクサウラベニタケ、ドクササコと続きます(グラフ)。発生件数上位のキノコによる中毒は今年も県内で発生しており、特に注意が必要です。

毒キノコのツキヨタケは食用キノコのムキタケやヒラタケと誤認しやすく(表紙写真)、間違えて食べると嘔吐・腹痛・下痢などを引き起こします。石づきに黒いシミがあるのが特徴ですが、シミが確認しづらいこともありますので気をつけてください。

表. 今年県内で発生したキノコによる食中毒

発生日	原因となったキノコ	市町村	患者数
9月29日	クサウラベニタケ	南陽市	2
9月30日	クサウラベニタケ	白鷹町	8
9月30日	クサウラベニタケ	山形市	5
10月6日	カキシメジ	川西町	1
10月14日	キノコ(種類不明)	山形市	2
10月14日	ツキヨタケ	小国町	8
10月16日	ツキヨタケ	高島町	2
11月9日	ツキヨタケ	小国町	2

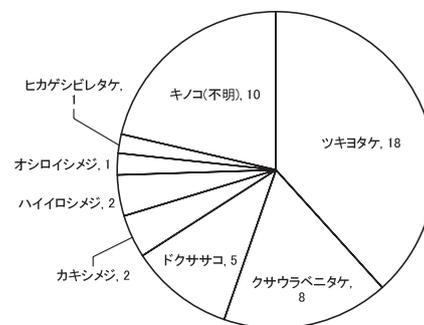
毒キノコのクサウラベニタケは食用のウラベニホテイシメジに形態がよく似ています(表紙写真)。見分け方のポイントはカサの表面に緋(かすり)模様や指で押したような斑があるのがウラベニホテイシメジです。またクサウラベニタケの柄は中空で柔らかいのにに対し、ウラベニホテイシメジは柄がしっかりとしています。クサウラベニタケを食べると、嘔吐・腹痛・下痢・発汗などが現れます。

ドクササコは橙褐色ないし黄褐色の漏斗型のキノコです。カヤタケなどと間違われることが多く、誤って食べると1週間ほど後に手足などの先端が赤く腫れ、激痛が1ヶ月以上続くことがあります。

これまで述べたキノコの特徴や判別法はあくまで簡易なもので、キノコの状態によっては判別しづらいことも多くあります。キノコを採る際は確実に判るもののみを採取し、「迷ったら採らない・持ち帰らない・食べない」を徹底しましょう。また、虫がついているキノコは食べられる、地味な色のキノコは食べられる、塩蔵すれば大丈夫…などの言い伝えは迷信ですので気をつけましょう。

今回紹介したキノコやその他について、詳細を衛生研究所のホームページや当所で作成した「毒に注意」というパンフレットで確認いただけます。ぜひご覧ください。

(理化学部 和田章伸)



グラフ. 県内のキノコによる食中毒発生件数 (H12~H21)

## 衛生研究所の学会発表 (2010年8月 ~ 2010年11月)

## 学会発表

- 1) 水田克巳、池田辰也、青木洋子、安孫子千恵子、板垣勉、勝島史夫、勝島由利子、阿彦忠之：新型インフルエンザによる呼吸器ウイルス流行へのInterferenceについて、第64回日本細菌学会東北支部総会、2010/8/19-20、仙台市
- 2) 瀬戸順次、安孫子千恵子：カメを取り扱う動物取扱業施設におけるサルモネラ汚染実態調査、平成22年度東北地区獣医師大会、2010/9/16-17、秋田市
- 3) 水田克巳：感染症臨床の現場と地衛研との連携—臨床検体からのウイルス分離にもとづいた疫学研究—第59回日本感染症学会東日本地方会学術集会、2010/10/21-22、東京都
- 4) 笠原義正、和田章伸：トリカブト属植物のアコニチン類の定量及びその毒性について、第47回全国衛生化学技術協議会、2010/11/11-12、神戸市

## 来春はスギ花粉の大飛散が予想されます!! ～早めの対策を～

当所では毎年スギ花粉の飛散数について情報提供をしており、その一環として気象条件やスギ雄花の生育状況などから、来シーズンのスギ花粉飛散数を予測しています。

今年も11月中旬にスギ雄花の着花量調査を行いました。県内4地域ともに雄花の着花が非常に良好という結果になりました。雄花の着花量は飛散する前年の夏の気象に影響を受け、高温で日照時間が長く降水量が少ない場合に増加するといわれています。今年の夏は県内全域で猛暑となり日照時間も長かったことから、雄花の着花が良好になったと考えられます。

夏の気象条件とスギ雄花の着花状況から総合的に判断すると、県内の来春のスギ花粉総飛散数は6,000～8,000個/cm<sup>2</sup>と予想されます。飛散の多かった2005年・2009年と同等もしくはそれ以上の飛散数となる可能性もあり、

過去10年間の平均値と比べると約2～3倍多く飛散すると予想されます。

このように、来年の春は飛散数が多くなると見込まれ、花粉症の症状が悪化する恐れがありますので、早めに対策を取ることをお勧めします。

スギ花粉飛散時期には、当所のホームページで県内の飛散状況を情報提供しておりますので、ご利用ください。

(生活企画部 最上久美子)

表 県内4地点の花粉飛散数データ(単位:個/cm<sup>2</sup>)

	山形市	新庄市	米沢市	三川町
2010年総飛散数	966	1,012	909	708
総飛散数平均値(過去10年)	2,891	2,839	3,161	3,087

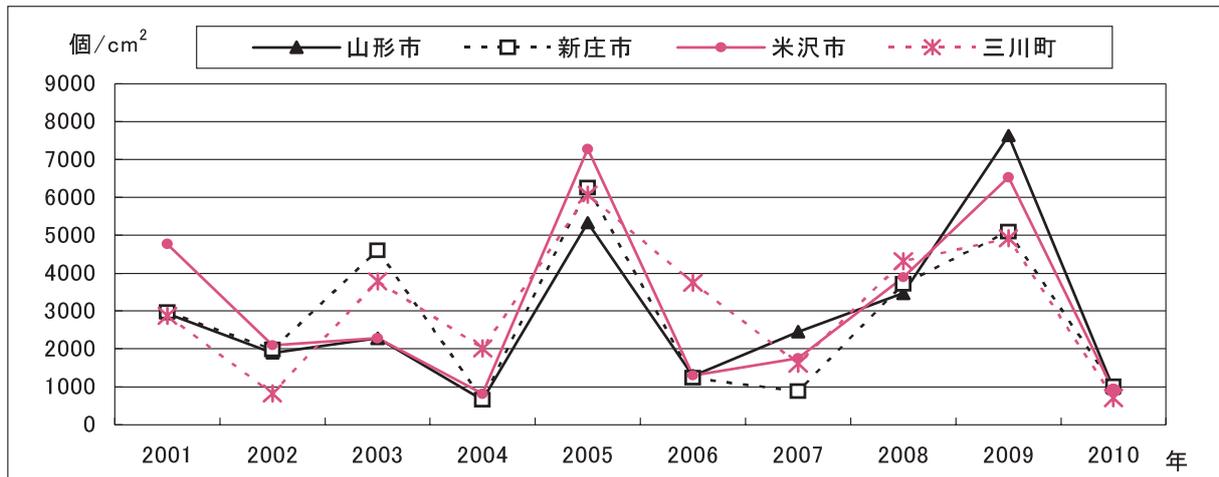


図 過去10年間のスギ花粉総飛散数の推移

## 衛生研究所の論文発表 (2010年9月～2010年11月)

### 論文発表

- 1) Matsuzaki Y., Mizuta K., Takashita E., Okamoto M., Itagaki T., Katsushima F., Katsushima Y., Nagai Y., and Nishimura H. Comparison of virus isolation using the Vero E 6 cell line with real-time PCR assay for the detection of human metapneumovirus. BMC Infectious Diseases. 10 : 170, 2010
- 2) Ujike M, Shimabukuro K, Mochizuki K, Obuchi M, Kageyama T, Shirakura M, Kishida N, Yamashita K, Horikawa H, Kato Y, Fujita N, Tashiro M, Odagiri T; Working Group for Influenza Virus Surveillance in Japan. Oseltamivir-resistant influenza viruses A(H1N1) during 2007-2009 influenza seasons, Japan. Emerg Infect Dis. 16 : 926-935, 2010
- 3) Mizuta K., Abiko C., Aoki Y., Ikeda T., Itagaki T., Katsushima N., Matsuzaki Y., Hongo S., Noda M., Kimura H., and Ahiko T.: Endemicity of human metapneumovirus subgenogroups A 2 and B 2 in Yamagata, Japan between 2004 and 2009. Microbiol.Immunol. 54 : 634-638, 2010
- 4) Tsukagoshi H., Masuda Y., Mizutani T., Mizuta K., Saitoh M., Morita Y., Nishina Y., Kozawa K., Noda M., Ryo A. and Kimura H.: Sequence and phylogenetic analyses of Saffold cardiovirus (SAFV) genotype 3 isolates from children with upper respiratory infection in Gunma, Japan. Jpn.J.Infect.Dis. 63 : 378-380, 2010

## 薬になる植物 (89) スベリヒユについて

山形の人ならヒョウ（植物）という野菜を食べた経験があると思います。おひたしにして辛子醤油で食べたり、茹でて乾燥し、冬場の料理のために保存することもあります（ひょう干し）。特に正月料理にはなくてはならないもので、縁起が良いものとされます。「ひょうとしていい事がある」とか「すべらんしょ」といって失敗しないという言葉にかけて縁起を担ぎます。このヒョウは植物名をスベリヒユといい、世界各地に分布し、日本でも全国に見られる1年草です。しかし、スベリヒユを食用としているのは山形県だけのようです。特に栽培しなくても畑の雑草のように生えるので食用になるとは思わないのかも知れません。でも、世界では食用にしている国が結構あります。フランスではプルピエ（スベリヒユのこと）サラダとして、ギリシャでは、ゆで卵と共に調理し、フリッタータという料理になります。イギリスではコンチネタル・パセリとして売っているそうです。ベルギーでは、スープにプルピエやチャイブの香味野菜を入れます。さらに、スベリヒユを野菜として改良したものはタチスベリヒユといい、ドイツ、フランス、オランダ、イタリア、インド、東南アジアで栽培されるようになりました。これは16世紀頃です。ヨーロッパや東南アジアでは食用にしているのに日本ではあまり知られておらず、山形だけがどうして食べるのでしょうか。これは、上杉鷹山が1783年に備荒食物の手引きとして編纂させた『飯糧集』やその後に発刊された『かてもの』にスベリヒユの調理の仕方が記してあるからかも知れません。『かてもの』によると、「ゆでて食う又かて物とす。わらび粉と食べ合わせべからず。」と記載されており、食べ合わせの注意も書かれているのはすばらしいことです。

同じスベリヒユ科の植物にマツバボタンがあります。葉の形がマツ葉のようでスベリヒユと似ていて茎や葉が肉厚になっています。さらにハナスベリヒユがあり、これはスベリヒユの花を大きくし、赤、ピンク、白、黄、オレンジ色など色とりどりの花をつけるようにしたものです。花壇の草花としてはマツバボタンよりも柔らかさがあり、人気も出ているようです。前述のように、雑草のように扱われているスベリヒユですが、食用にもなり、また薬用にもなります。“雑草”という言葉は本来は正しくありません。名前のない植物など日本にはないはずですが、もしあったとしたら新種なので、名前をつけなくてはなりません。

**概要：**スベリヒユ (*Portulaca oleracea*) はスベリヒユ科

(Portulacaceae) の植物で、民間では清熱解毒、消腫薬として、毒虫や蛇にかまれた時、または、腫瘍や悪瘡、丹毒に用いるとされています。漢方では、馬齒莧といい薬にします。名前の由来は、その植物の葉が馬の歯のように並んでいるからだそうです。ちなみに葉の小さいものを鼠齒莧(そしけん)というのだそうです。また五行草ともいいます。これは葉が青で、梗が赤で、花が黄、根は白、種子は黒なので陰陽五行説の五色に当てはまるからだそうです。その他の薬効は、細菌性の下痢、小児の下痢、百日咳、化膿性の疾患、湿疹、皮膚炎にも用いるようです。

**成分：**ある文献ではノルアドレナリン、ドパミン、ドーパを含むと報告しています。これらの成分は、生体内の神経伝達物質や脳の伝達物質です。また、ビタミン類としてA、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、C、ニコチン酸、トコフェロールなどが含まれ、ミネラルとしてはカリウムが多く、有機酸のクエン酸、リンゴ酸、アミノ酸類のアスパラギン酸、グルタミン酸も含まれています。

**薬理作用：**ウサギの血圧を上昇させたり、モルモットやウサギの子宮を収縮させる作用があります。赤痢菌に対して殺菌作用があり、チフス菌や大腸菌、黄色ブドウ球菌に対しても抗菌作用があります。真菌に対してもある程度抑制します。

しかし、スベリヒユの薬理作用と活性物質の関係は日本や欧米ではまだ確かめられておりません。これから科学的な研究が必要な薬草です。中国では薬草そのものの臨床データがありますので参考になるかも知れません。以下に挙げてみます。細菌性の下痢の予防としてスベリヒユを1日1回食べると

発病率が下がったこと。鉤虫病に対してスベリヒユと酢をまぜて飲ませると80%が陰性になったこと。急性虫垂炎にスベリヒユと蒲公英を用いたら31例中30例が治癒したこと。化膿性の皮膚病に塗り薬に加えて患部に塗布したところ良好な結果を得た事などがあります。

山形ではスベリヒユを食用にしますが、特に身体に対して効果を実感するようなことはないように思えます。しかし、毎日食べるとか、1週間集中して食べたりすると、何らかの作用が見えてくるかも知れません。江戸時代の『本朝食鑑』では「多く食べても下痢するだけで心配ない」としています。先人達は、今のような薬がなかったので、自然の草木を利用してきました。従って科学的に研究すれば、その作用が証明されると考えます。

(理化学部 笠原義正)

